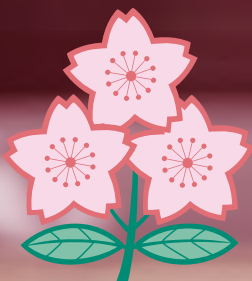


JAPAN RUGBY ANNUAL REPORT 2024



**JAPAN
RUGBY**

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会





5つの コアバリュー

ラグビー憲章の中でラグビーが有する価値として
5つのコアバリュー「品位・情熱・結束・規律・尊重」が紹介されています。
コアバリューは、選手、指導者、トレーナー、メディカル、レフリー、
スタッフ、関係者、ファンなど、ラグビーに関わるすべての人に
大切にしてほしい基本となる考え方、価値観です。

品位

INTEGRITY

品位とは、ラグビーをつくるものの中心であり、
誠実さとフェアプレーから生まれる。

尊重

RESPECT

チームメイト、相手、レフリー、
および、ラグビーに関わる人々を尊重することは、
最も優先すべきことである。

情熱

PASSION

ラグビーに関わる人々は、
ラグビーに対する熱い情熱を持っている。
ラグビーは、感動を与え、思い入れをもたらし、そして、
世界のラグビーファミリーへの帰属意識を生む。

規律

DISCIPLINE

規律とは、ラグビーにとって
フィールドの内外で不可欠なものであり、
競技規則、競技に関する規定、そして、
ラグビーのコアバリューの遵守によって示される。

結束

SOLIDARITY

ラグビーは、生涯続く友情、仲間、チームワークそして、
文化的、地理的、政治的、あるいは、
宗教的な垣根を越えた忠実さへと通じる、
一つとなった精神をもたらしてくれる。



INDEX

5つのコアバリュー 2

INDEX 3

会長メッセージ 4

数字で見る 日本ラグビー 5

1章 活動報告 6

専務理事メッセージ 7

Year in Review 2024 8

中期戦略計画2021-2024 9

Ⅰ. 協会刷新 10

Ⅱ. 強化 12

Ⅲ. 普及育成 14

Ⅳ. リーグ改革 16

Ⅴ. 社会連携 17

2章 ビジョンと戦略 20

JAPAN RUGBY 2050 21

取り組むべき3つの課題 22

中期戦略計画2025-2028 23

成長サイクル 競技力の強化 25

成長サイクル 収益力の強化 26

成長サイクル 関係人口の拡大 27

成長サイクル 基盤強化 29

3章 ガバナンス 35

コーポレートガバナンス 36

ガバナンスコードへの対応 37

コンプライアンス・インテグリティ 38

支部報告 39

表彰受賞者 40

スポンサー 41

団体名の表記について

本レポートでは、日本ラグビーフットボール協会を「JRFU」と略記する。

本レポートの報告対象期間

2024年4月1日～2025年3月31日

※ ジャパンラグビーリーグワンは2024-2025シーズンを対象とする。

「ANNUAL REPORT2024」を
お読みになったご感想をお聞かせください

感想はこちらから

特集 | 対談
女子ラグビー 世界一を目指して 31

佐々木則夫 × 浅見敬子

2011年女子サッカーワールドカップにおいて、なでしこジャパン監督として女子サッカー日本代表を世界一に導いた佐々木則夫氏をゲストに迎え、女子サッカーと女子ラグビーのこれまでとこれからについて浅見敬子副会長と熱く語っていただきました。

会長メッセージ

ラグビーワールドカップの近い将来での招致を実現するため
日本ラグビーに関わるすべての方々と心をついに歩みを進めます。

公益財団法人
日本ラグビーフットボール協会
会長

上田 雅人



「ラグビーが、世界一身近にある国へ」

平素より、日本ラグビーへの熱いご声援を賜り、心よりお礼申し上げます。協賛各社様をはじめ、日本ラグビーに関わるステークホルダーの皆さまにおかれましては、多大なるご支援、ご協力に、重ねて感謝申し上げます。このたび、アニュアルレポート2024年度版が完成致しましたので、ご報告申し上げます。

チャレンジを続けた4年間

2024年度は、RWC2019日本大会の後に策定した、JAPAN RUGBY中期戦略計画2021-2024の最終年度でした。この4年間を振り返ると、当初はコロナ禍により、代表活動をはじめとする大半の事業活動が、何らかの影響を受ける状況でした。そのような事業環境下ではありましたが、トップリーグからリーグワンへの移行、ジャパンラグビーマーケティングの設立、JAPAN BASEの開設、女子ラグビー戦略の策定など、新

規事業へのチャレンジを続けてまいりました。海外戦略としては、ワールドラグビーとの連携強化や、強豪国のユニオンとの覚書締結などを進めたことに加え、この間の代表チームの活動実績や私どもの協会としての総合力が評価され、2023年5月、ワールドラグビーからハイパフォーマンスユニオンとして認められ、国際的地位を確立することができました。

目標達成に向け新たなスタート

今年3月22日、JAPAN RUGBY中期戦略計画2025-2028を公表致しました。この中で、私どもは、RWCの近い将来での招致を実現するための成長サイクルとして、これまで進めてきた「基盤強化」を一層盤石なものにするともに、「競技力の強化」と「収益力の強化」を推進し、そこで得られた資産を「関係人口の拡大」に投資していくこととしました。この成長サイクルを推し進めるため、事業全体を7つのPillar(強化、エンゲージメント、普及育成、女子ラグビー、組織基盤、財務基盤、価値基盤)に分解し、それぞれについて、遂行責任者と推

進組織、達成目標を定めて、目標の達成に向け、新たなスタートを切ったところです。

100周年に向けて

弊協会は来る2026年11月30日、創立100周年を迎えます。これまで、日本ラグビーの普及発展のため尽力された先人たちへの敬意と感謝を胸に、この先もさらなる進化・発展を遂げられるよう、私が先頭に立って、取り組んでまいり所存です。JAPAN RUGBY2050で定めた活動指針「ラグビーが、世界一身近にある国へ」「世界のラグビーをリードし、スポーツを越えた社会変革の主体者となる」「再びワールドカップを日本に招致し、世界一になる」を実現すべく、日本ラグビーに関わるすべての方々と心をついに、歩みを進めて行きたいと考えております。

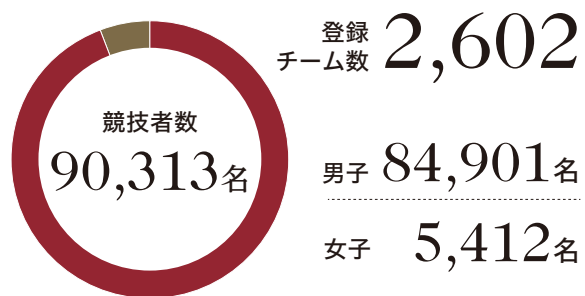
引き続き、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

数字で見る 日本ラグビー

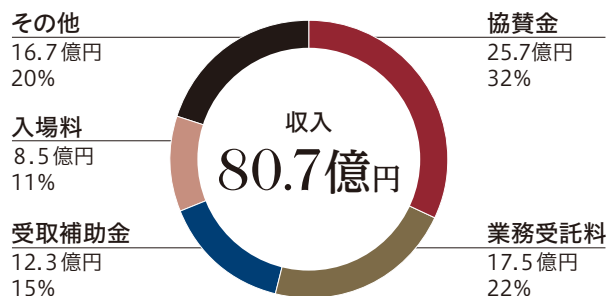
日本ラグビーの現在地を、さまざまな角度から「数字」でご紹介します。登録チーム数、競技者数、リーグワン総入場者数、収益構造、世界ランキング、公式SNSフォロワー数など——それぞれの数字が、国内外での日本ラグビーの存在感と未来への可能性を物語ります。



登録チーム・競技者数



収益構造



NTTジャパンラグビー リーグワン 2024-2025総入場者数

JAPAN RUGBY LEAGUE ONE
1,187,470人



公式SNSフォロワー数

※2025年5月31日時点

X 27.9万人 Facebook 16.4万人
Instagram 16.4万人 YouTube 9.8万人
TikTok 8.7万人



ワールドラグビー 世界ランキング(15人制) ※2025年3月31日時点

男子 13位 女子 11位



パリ2024オリンピック (7人制ラグビー)

男子 12位 女子 9位

日本ラグビー100年の歴史

- 1823年** イングランドのラグビー校でのフットボールの試合中、エリス少年がボールを抱えたまま走り出した。これがラグビーの起源とされている
- 1899年** 慶應義塾の教員であったクラーク氏が田中銀之助氏とともに慶應義塾の学生にラグビーを指導した
- 1926年** 日本ラグビー蹴球協会が設立される
- 1956年** 財団法人へ移行
- 1965年** 初の日本代表合宿が開催される
- 1987年** 第1回ワールドカップが開催される
- 2003年** ジャパンラグビートップリーグが発足
- 2009年** RWC2019の日本開催が決定
- 2013年** 公益財団法人へ移行
- 2015年** RWC2015イングランド大会において、南アフリカ代表に勝利する
- 2016年** サンウルブズとしてスーパーラグビーに参画
- 2019年** RWC2019日本大会が開催、日本代表は初めて決勝トーナメント進出を果たす
- 2021年** トップリーグからリーグワンへ移行
- 2022年** ジャパンラグビーマーケティング株式会社が設立
- 2023年** 福岡に日本ラグビー初の強化拠点としてJAPAN BASEを開設
ハイパフォーマンスユニオン入りが承認された

1章 活動報告

専務理事メッセージ	7
Year in Review 2024	8
中期戦略計画2021-2024	9
I. 協会刷新	10
II. 強化	12
III. 普及育成	14
IV. リーグ改革	16
V. 社会連携	17



専務理事メッセージ

中期戦略計画2021-2024の最終年度として
いかに次の4年に繋げるか、未来への継続性を意識して
各種事業を進めました。

公益財団法人
日本ラグビーフットボール協会
専務理事

岩 利 健 輔



日頃より、弊協会事業へ多大なるご支援を賜り、ありがとうございます。協賛各社はもとより、全国のラグビーフットボール協会の皆さま、自治体の皆さまには、テストマッチをはじめとする国際試合、大学・高校の各種大会、普及育成事業の運営などへのご協力を賜り、重ねて感謝申し上げます。この章では、主に2024年度の協会事業についてご報告申し上げます。

2024年度事業の成果・実績

2024年度は、中期戦略計画2021-2024の最終年度でございますが、2025年からの中期計画に続く年度として、未来への継続性を意識して、各種事業に取り組みました。

「協会刷新」 事業の拡大、さらなる成長のために、昨年4月にはオフィスをジャパンラグビーリーグワン、ジャパンラグビーマーケティングとともに移転し、シームレスな働き方を実現しました。ラグビーの全国的な発展のため、全国都道府県理事長会議や自治体ワンチーム総会などを通して、地域連携の強化を進めました。ラグビーの価値を守るため、インテグ

リティ推進やコンプライアンス遵守などの活動にも取り組みました。

「財務」 2024年度は、ラグビー界発展のために、さまざまな事業活動にチャレンジした1年となりました。この間も追加的な収支改善策を講じてまいりましたが、最終的に当期一般正味財産増減は+17百万円となりました。2025年度は、経費執行や進捗モニタリングなどの管理体制も一層強化して取り組む所存です。

「強化」 男子15人制は、将来の代表選手の育成を加速するため、JAPAN TALENT SQUADプログラムを開始しました。強化とウェルフェアの両立を目指し、リーグワンとの連携も強化しました。女子15人制は、RWC2025に向けWXVに参加し、年間10試合のテストマッチを戦い、選手層の拡大と国際経験値の向上を進めました。7人制はパリオリンピック(2024年)において、男女とも目標であったメダル獲得は叶いませんでしたが、その後も、アカデミー活動の拡充や若手世代の積極的な国内外の大会参戦を行い、女子は世界大会で史上初めて準決勝に進出するなど、新たな体制で成長しております。

「普及育成」 必要な資源(人材や資金など)の質と量を高めるなど、全国のラグビーフットボール協会やクラブ・チームの活動を支える取り組みを強化しました。また、安全・安心にプレーを続けられる環境を整えるとともに、ラグビーの楽しさや価値を多くの人々に広める活動も継続しました。

「リーグ改革」 2024-2025シーズンから3チームの新規参入が決まったことを受け、さらに高品質のラグビーサービスが提供できるよう、サポート体制の強化や人材育成に取り組みました。

「社会連携」 国際連携や社会貢献に関わる取り組みを継続するとともに、ジャパンラグビーマーケティングにおけるファンエンゲージメント事業やJAPAN BASEの活用施策などを推進しました。

2025年度も、コアバリュー(品位、情熱、結束、規律、尊重)を大切にしながら、さまざまな課題に対峙してまいります。引き続き、ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い致します。

Year in Review 2024



2024.7.26

セブンズ男女 パリオリンピック(2024年)出場

男女セブンズ日本代表はパリオリンピック(2024年)に出場。3大会連続出場も男子は健闘及ばず12位。女子は過去最高の9位で大会を終えました。

2025.2.21

HSBC SVNS2025 史上初のベスト4

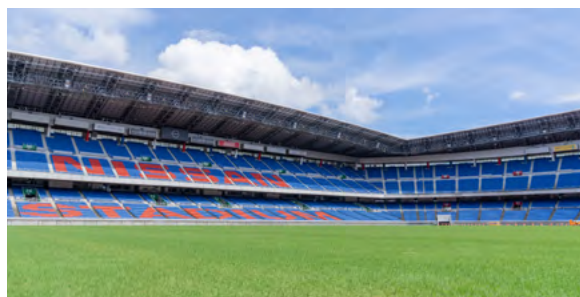
女子セブンズ日本代表は「HSBC SVNS2025 バンクーバー大会」でワールドシリーズにおける過去最高の4位となりました。



2024.4.25

JAPAN TALENT SQUAD プログラム始動

将来の日本代表選手の育成を加速するためのプロジェクトとして始動。選抜された14名の大学生を対象にプログラムを実行しました。



2024.10.9

環境サステナビリティ 推進宣言

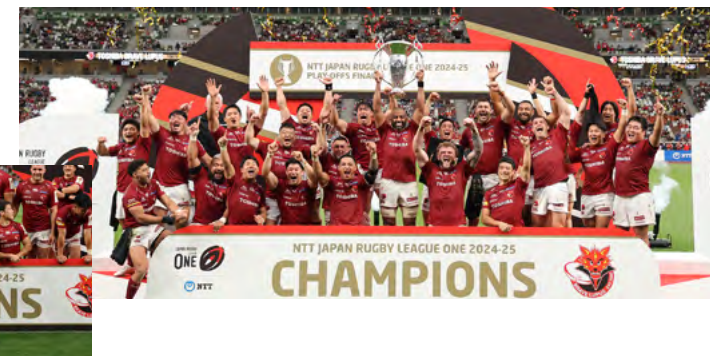
世界的な気候変動問題へ取り組むため、環境サステナビリティ推進を宣言。国連の「スポーツを通じた気候行動枠組み」に署名しました。



2025.6.1

リーグワン 2024-2025シーズン 閉幕

国立競技場で行われたプレーオフトーナメント決勝戦に勝利した東芝ブレイブルーパス東京が、2季連続2回目の優勝を成し遂げました。



中期戦略計画2021-2024

中期初年度である2021年度は、コロナ禍により、代表活動をはじめとする大半の事業活動が影響を受けました。そのような環境下でしたが、トップリーグからリーグワンへの移行、ジャパンラグビーマーケティングの設立、JAPAN BASEの開設、女子ラグビーの戦略策定など、新規事業へのチャレンジを進めた4年間でした。この間の代表チームの活動実績や協会としての総合力が評価され、2023年5月、ワールドラグビーからハイパフォーマンスユニオンとして認められ、JAPAN RUGBYの国際的地位を確立することができました。

5つの領域	8つの目標	レビュー
I. 協会刷新	<ul style="list-style-type: none"> ● 世界一のラグビーユニオンを目指して抜本的に組織を見直し、理念実現のための強固な経営基盤をつくる ● 世界一のラグビーユニオンを目指して経営の安定化を図り、未来への投資を拡充させるための財務基盤を確保する ● 安全で、誠実なラグビーを通じてラグビー憲章を守る 	2022年5月、基盤強化の一環として人材戦略と中期財務計画を策定しました。その後、これらに基づく、人事制度改革やガバナンス強化に取り組み、財務運用を開始しました。しかし、2024年度末時点において、中期財務計画に掲げた目標は達成できませんでした。
II. 強化	<ul style="list-style-type: none"> ● 代表チームを支える環境を整備し、すべてのラグビー日本代表を戦略的に強化する 	プレーヤーウェルフェアを念頭に置いたカレンダーや危険の少ないルールを整備すると共に、各種データのプラットフォーム構築や一環指導体制を構築しました。しかし、ワールドカップおよびオリンピックにおいては、当初の目標を達成できませんでした。
III. 普及育成	<ul style="list-style-type: none"> ● 誰でも、いつでも、どこでも楽しめるラグビー社会をつくる 	コーチ育成、活動助成金など地域資源の拡充、RDO（地域普及担当者）の配置増、支部協会との連携強化に取り組みました。安全安心にプレーできる環境を整備すべく、ルールや大会の改善を図りました。登録競技者数はほぼ前年並みで推移しました。
IV. リーグ改革	<ul style="list-style-type: none"> ● ラグビーファンが熱狂する舞台をつくる 	ファンが熱狂する舞台をつくるため、ラグビーの事業化推進、社会性向上に取り組みました。JRFUからリーグワンへの主管権委譲を完了させ、初期事業モデルを構築、地域および自治体との連携、普及プログラム推進にも取り組みました。
V. 社会連携	<ul style="list-style-type: none"> ● ラグビーのチカラを使って、社会の役に立ち、世界を守る ● ラグビーが起点となって日本に新しい産業をうみだす 	2021年9月、D&I推進宣言を行い、女性活躍推進やLGBTQ+の啓発活動、障がい者ラグビー団体との交流などに取り組みました。ファンエンゲージメントを推進するためジャパンラグビーマーケティングを設立、福岡にJAPAN BASEを開設しました。

I. 協会刷新

2024年度は、中期戦略計画の最終年度として、積み残したさまざまな組織改革に取り組むと同時に、本部のオフィス移転など、職員の労働環境の改善や各種制度の整備を進めました。また、「自治体ワンチーム(ラグビーとの地域協創を推進する自治体連携協議会)」との連携を強化し、共同での取り組みや自治体と都道府県協会との連携事業のコーディネーションを進めました。これらの活動を通じ、「地域ラグビーのエコシステムの確立」という、次期中期計画に向けて大目標を設定するに至りました。

新オフィス開設



新オフィスエントランス

職員数の増加にともない、執務スペースが手狭となったことに加えジャパンラグビーリーグワンやジャパンラグビーマーケティングとの協業体制確立に向けて、オフィスを新青山ビルに移転しました。これにより、3団体が同じフロアで働くこととなり、職員同士のコミュニケーションが活性化、さらに会議や打ち合わせスペースに加えて、食事や休憩などのレストスペースも確保しました。また、エントランスやオフィスに大型モニターを設置し、来訪者を含めてラグビー中継やラグビーに関わる情報発信を提供できる環境を実現しました。

Voice



総務部門長
福留 進

職員の意向をとりまとめ、短期間での移転を実施

短期間での移転プロジェクトとなりましたが、職員の意見を反映させながら丁寧に対応することができました。無事移転が終了したことに関して、関係者並びに職員の皆さまに改めて感謝申し上げます。

自治体連携の強化

2024年度は、自治体とラグビー協会の連携を深化させ、ラグビー普及を活性化させる地域連携機会創出に注力しました。

都道府県理事長会議や自治体ワンチーム総会は、双方の中期計画・事業計画を共有することで連携し、相乗効果をさらに高めました。特に、日本代表戦を契機とした連携事業は活発で、東京都、豊田市、仙台市、札幌市、北九州市、横浜市など各地で展開しました。加盟自治体とのイベント連動企画、パブリックビューイング、オリンピックPR、男女代表戦周知、デジタルヨセガキ企画など、多岐にわたる情報発信と地域連携

が実現しました。自治体ワンチームの総会では、日産スタジアムでの伝達会議、環境サステナビリティ推進宣言発信調整や17自治体参加の試合視察・講義が行われ、JRFUが取り組む保育園・幼稚園を対象にした普及事業(Canterbury Rugby Little Playfield)の併催実施は特筆すべき成果となりました。これらの活動を通じて、JRFUと自治体ワンチームとの円滑なコミュニケーションと協力体制は確実に構築され、情報管理・利活用基盤も整備できました。

Voice



業務推進部門長
熊木 陽一郎

都道府県協会と自治体ワンチームとの連携強化

2025年度は都道府県ラグビー協会の普及育成活動の持続的発展に向けた地方自治体との連携・機会創出を積み重ね、好事例や課題解決の成果共有、展開を図ることに注力致します。

I. 協会刷新

WEB 財務諸表はこちら

財務レポート

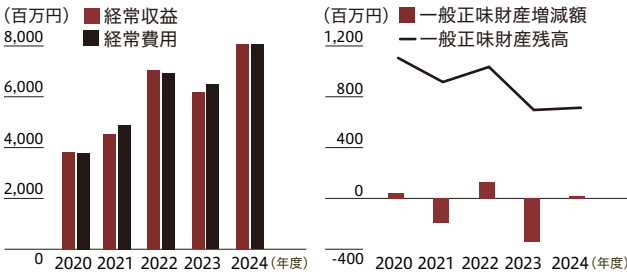
前年度対比(国際試合の開催増加による経常収益の増加)

前年度の2023年度においては、ワールドカップイヤーに課題となっている15人制男子日本代表戦の国内開催試合数の確保において、例年より多い5試合を開催できましたが、代表強化費の増加やJAPAN BASE施設の稼働、オリンピックアジア予選の日本開催などの負担が増加し、一般正味財産増減額は▲343百万円でありました。

2024年度は15人制男子日本代表戦の国内開催数を前年度から4試合増加させた9試合とするなど、強化と収益拡大の両立を図りました。これにより事業収益が拡大し、経常収益が80億円を超え8,071百万円となりました。一方で代表戦の開催経費や代表強化費が増加し、経常費用も80億円を超過し8,054百万円となりました。この結果、一般正味財産増減額は17百万円となり、一般正味財産残高は716百万円となりました。

指定正味財産増減においては、指定事業の費用に充当する

経常収益と一般正味財産残高の推移(年度別)



ために326百万円を取り崩したことに加え、特定資産の評価損により一般正味財産への振替額が増加し、▲676百万円の減少となり、残高は5,122百万円となりました。

予算対比

15人制男子日本代表戦の国内開催数増加により、経常収益は拡大しましたが、集客や協賛収益などが目標に届かず、9,009百万円の予算に対して実績は8,071百万円にとどまり、938百万円の未達となりました。

経常収益の減少に対応し、各事業においてはコスト削減に取り組み、経常費用は予算8,496百万円に対し、実績は約8,054百万円となり442百万円の減少となりました。この結果、計画した経常利益512百万円には届かず、実績は17百万円にとどまり、日本代表戦などの有料試合における収支効率の改善が課題となりました。

また、一般正味財産増減額の対予算比では▲495百万円の差異が生じました。

資産状況

資産の部においては、流動資産が前年度に対して563百万円の増加となり3,702百万円となりました。固定資産はレガシー充当資産などの減少により、714百万円減少し、5,417百万円となり、資産合計は151百万円減少し9,119百万円となりました。

負債の部においては、流動負債が短期借入金や未払金など

の増加により573百万円増加し、2,647百万円となりました。

この結果、一般正味財産および指定正味財産を合算した正味財産合計は5,838百万円となりました。

次年度へ向けて

このような状況を踏まえ、15人制男子代表戦の国内開催数の維持とともに、各試合会場での集客増加と利益管理の強化による、普及育成事業などへの安定的な財源確保が重要な課題となっています。

中期戦略計画2025-2028の財務基盤においては、JRFUの各事業の拡大に対応した効率的な収支・投資管理を目指し、将来のラグビー関連事業の発展と投資に向けて、安定的かつ健全な財源の積立を推進してまいります。

Message



理事 会計役
鈴木 彰

過去最大の経常収益となるも、収支効率の改善が課題

2024年度は各事業のコスト削減により経常利益確保となったが予算とは大幅な乖離が生じました。収益拡大に向けた集客増や協賛他の収入増と併せて、常に費用対効果を念頭に置いた支出管理に取り組んでまいります。

Ⅱ. 強化

次世代代表の成長を促すため、高校・大学世代へワールドスタンダードを伝授、代表層の拡大を狙う新たな取り組みに着手しました。女子はRWC2025イングランド大会に向けて、国内大会のレベルアップを図ると共に、国際大会経験を積み上げ、成長の1年とします。7人制は男女ともパリオリンピック後の新たな体制へシフトし、さらなる成長を目指します。

JAPAN TALENT SQUAD プログラム2024

始動の背景と今後の展望

JAPAN TALENT SQUAD プログラムは、世界の舞台で活躍できる選手育成を目指すプログラムとして2024年にスタートしました。

主な内容は、大学以下の世代に対し、S&C(ストレンクス&コンディショニング)および、栄養面における年間を通したサポートを行います。公式戦を除いたシーズンに、ジョーンズHCや日本代表スタッフが直接指導する合宿を通じて、代表スタンダードの経験と成長の機会を提供します。

世界の強豪国が若手選手の育成を加速させている現在、何もしなければ差を埋めることはできません。2027年に控えるワールドカップやその先の将来を担う選手へ直接指導を行うことで、選手のポテンシャルを高め、早期に代表で戦う選手が一人でも誕生する環境を整えることで、代表層を厚くしたいと考えています。



2024年は、延べ3日間大学生15名参加の短期プログラムとして実施しました。2025年は大学生年代(一部高校生も参加)を中心に、23歳以下の選手を約50名選拔し、国内合宿に加えて、海外遠征・国内試合も組み込み年間を通してサポートする内容にバージョンアップします。

若手選手が海外遠征する意味について、ジョーンズHCは「若い選手たちにとって、トップクラスのラグビーを初めてプレーする機会を得ることは重要、国内システムの中では、彼らはビッグスターかもしれないが、それをワールドレベルで、同じポテンシャルが発揮できるかを知る機会を得る」と述べています。

強化合宿

高校・大学世代へ代表コーチが直接指導することにより、代表トレーニングの体験を通し、ワールドスタンダードの伝授を広く図ります。

選拔

次世を担う代表としての振る舞いや、トレーニングへの取り組み、限られた時間で準備を行い、世界と戦うというマインドの醸成を図ります。

遠征

日常とは異なる環境の中で世界との戦いを通して、現状を知り、自己認識することで、次へのアプローチを考える機会をつくります。

プログラム日程

1日目

- Medical Check
- Team Briefing
- Unit Briefing
- Strength



2日目

- 1on1 Meeting
- Unit Training
- Team Training
- A&D vs League one
- Rugby Tankyu(探求)



Message



日本代表HC
エディー・ジョーンズ

異なる刺激に触れることが、自己成長を促進する

日常と異なる環境・コーチングを体験することは、自己認識の機会を増やします。刺激を受けることで、自ら考え、行動を変え、成長を実感することが自己変革に繋がると考えています。

II. 強化

WEB JRFU 大会・試合情報はこちら

セブンズ(7人制)

パリ五輪過去最高の9位に(女子)

オリンピックという最高の舞台で女子セブンズチームは過去最高の結果を収めることができましたが、男女ともメダル獲得という目標にはまだ遠く、望んでいた結果を残すには至りませんでした。

開催国であるフランスのラグビーへの献身が作り出した満員のスタジアムの景色は、ラグビープレーヤーとして最高の舞台であり、男女セブンズメンバー・スタッフの生涯にわたる思い出となり、経験になりました。

応援いただきました皆さまにとっても残念な結果となりましたが、パリ大会を経験したスタッフ・プレーヤーが感じた、実力プラスαの力を発揮できなければ、大舞台では勝利を得られないという事実を忘れず、さらに男女セブンズの強化を進めオリンピックでのメダル獲得を目指してまいります。



新体制でさらなる飛躍を

任期満了となる女子チームディレクターの宮崎善幸に代わり、男子チームディレクターの梅田紘一が男女の強化を統括する男女セブンズ日本代表チームディレクターに就任。女子HCであった鈴木貴士を男女7人制コーチングディレクターとする体制に変更し、選手の発掘から育成、コーチの育成にわたるマネジメントを強化。HCも男女アメリカセブンズの躍進を支えてきたフィル・グリーンングを男子HCに迎え、女子HCにはリオオリンピック出場、女子代表コーチとしてパリオリンピックの女子躍進を支えた兼松由香を昇格させ新たな体制で強化を進めます。

Message

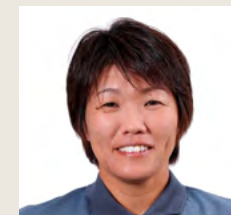


男子セブンズ日本代表 HC
フィル・グリーンング

世界へつながる
パスウェイを

競技力とスキルの向上を軸に、若い選手が成長できる環境と明確なパスウェイを構築します。クラブや大学との連携を深め、日本代表が世界で戦うための確かな基盤を築くとともに、ラグビーへの情熱と伝統を次世代へ繋げていきます。

Message



女子セブンズ日本代表 HC
兼松 由香

世界中の人々の心を繋ぐ
存在に

リオ、東京、パリ大会に挑み、サクラの想いを繋いでくれたサクラセブンズの仲間たちに感謝します。サクラセブンズの楯円球を「繋ぐ」ラグビーを通して、過去から未来へ想いを繋ぎ、世界中のあらゆる人々の心を繋ぐ存在になることを目指します。

Ⅲ. 普及育成

タグ・ミニ・ジュニアラグビーの拡充

一人でも多くの子どもたちが、安全・安心にラグビーを楽しめるよう、プレー環境を整え、地域レベルで多くのプレーヤーが参加できる大会を創出しています。

FOR ALL ミニ・ラグビーフレンドリーマッチ

1月25日(土)・26日(日)に、小笠山総合運動公園エコパスタジアム(静岡県袋井市)にて開催されました。全国各地から8つの小学生チームが参加し、1試合ごとにエントリー選手全員を出場させるなどの特別ルールも設けられ、選手たちは、全力でプレーをしていました。アフターマッチファンクションでは、選手同士だけでなく、コーチ同士の交流も行われました。



JRFUでは普及育成事業を4つの領域に分け、それぞれ連携しながら取り組んでいます。一つ目は、必要な資源(人材、拠点、資金、情報)の質・量を高めること、二つ目は、全国の協会やクラブ、チームの取り組みを支えること、三つ目は、より安全・安心にプレーを続けられる環境を整えること、そして四つ目は、ラグビーの楽しさや価値をより多くの人々に広めることです。



SMBCカップ 第21回全国小学生タグラグビー大会

2月23日(日)・24日(月)に、熊谷スポーツ文化公園ラグビー場Aグラウンド(埼玉県熊谷市)で開催されました。全国各地の都道府県・ブロック大会に902チーム、7,359名の子どもたちが参加した都道府県・ブロック大会を経て選出された30チームが熊谷ラグビー場に集まり、素晴らしいプレーを繰り広げました。それぞれの試合の後には、アフターマッチファンクションが行われ、チーム内で選ばれたMIP(Most Impressive Player)をお互いに表彰し、対戦相手の良いプレーを称えあっていました。そのほか、今大会には、第19回大会に選手として出場した経験をもつ現役中学生がマッチオフィシャルとして参加し、4試合で笛を吹きました。

太陽生命カップ2024

第15回全国中学生ラグビーフットボール大会

9月14日(土)・15日(日)・16日(月・祝)の三日間にわたり、ケーズデンキスタジアム水戸、ツインフィールド(茨城県水戸市)で開催されました。全国の予選を勝ち抜いた、第1ブロック

(中学校男子)、第2ブロック(ラグビースクール男子)の各8チームと、第3ブロック(都道府県代表女子)の9チーム、第15回記念ブロック特別推薦枠の4チームが出場しました。どのブロックも熱戦が繰り広げられ、第1ブロックは茗溪学園中学校、第2ブロックは江東ラグビークラブ、第3ブロックは福岡県女子代表、第15回記念ブロック特別推薦枠の部では鈴鹿ラグビースクールがそれぞれ優勝しました。



Voice



普及育成部門 部門長補佐
中村 愛

ラグビーで人生に彩りを

選手やチーム関係者、大会を支える役員に共通する「ラグビーが大好き」という気持ち。ラグビーの大会を通じて出会う仲間や培う経験が、人生を豊かにし、彩りをもたらすと確信します。

Ⅲ. 普及育成

U19フレンドリーエリアマッチ



このイベントは、高校生ラグビー競技者がセブンズや15人制のラグビークリニック、交流試合、試合後のアフターマッチ

ファンクションなどを通じ、試合機会の創出とプレーヤー間の交流を図り、ラグビーの楽しさを感じてもらえる場を提供することを目的として開催されています。今期は11月～2月にかけて高校やクラブなどのチームが参加し、沖縄県、福島県、香川県の3会場で開催されました。

当日のプログラム前半のクリニックでは、元日本代表選手を講師に迎えたスキルセッションが行われ、後半はゲームを行いました。ゲームでは、各チームのプレーヤーが入り混じった混成チームでの試合も行われ、プレーヤー間の交流を深めました。また、会場によっては中学生や女子も参加しました。

ラグビー・エンパワメント・プロジェクト(REP)

このプロジェクトは、よりよい未来の実現に貢献する人材の育成を目指し、高校生を対象に実施する次世代リーダー育成事業の一環です。毎年開催しており、今回で4期目となりました。8～12月にかけて全6回の研修が行われ、男子7名、女子13名の20名が修了となりました。

第1回の集合研修は、JAPAN BASEで行われ、女子日本代表選手へのインタビューやグループワークが実施されました。第2回～第5回はオンラインで行われ、JICA(国際協力機構)海外協力隊の現役隊員やレフリー、元女子7人制代表HC、協賛企業、ラグビー経験のある経営者といった多様な

方々を講師に迎え、参加した高校生たちはラグビーの価値を学び、プレゼンテーションをするなど、多くの刺激を受けることができました。最終回では、熊谷市で集合研修を行い、「未来をつくる、未来のわたし」をテーマに、全員が、REPで学んだこと、そして自分の将来の夢をスピーチしました。



Voice



普及育成部門
吉富 さやか

ラグビーが繋ぐ、
特別な経験と新たな出会い

交流試合やアフターマッチファンクションを通じて、競技そのものの面白さや、仲間と過ごす時間の大切さを実感していただけるよう工夫しています。今後もより多くの方にラグビーの楽しさを届けていけるよう努めてまいります。

Voice



普及育成部門
鈴木 江里菜

自分の将来を描く
ヒントが見つかる

このプロジェクトでは、同年代のラグビー仲間やラグビーを軸に人生を築いた多くの講師との出会いを通して、自分の将来を描くヒントが見つかります。自分自身の可能性を見つめ、キャリアや夢を探求できることが最大の魅力です。

IV.リーグ改革

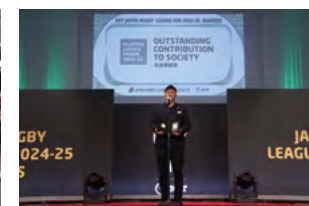
2024-25シーズン速報

フェーズ2を迎えたNTTジャパンラグビー リーグワン 2024-25シーズン。特にD1においては、レギュラーシーズンの試合数増加とプレーオフトーナメント出場チーム枠の拡大によって、より多くのチームに頂点を目指すチャンスが生まれました。これにより、レギュラーシーズン終盤まで激しい順位争いが繰り広げられ、目の離せない試合が続きました。D2は8チーム編成となり、D3は3チームが新規参入し合計6チームとなり、下位ディビジョンも活性化。上位ディビジョンへの昇格チームは現れなかったものの、D2の優勝は豊田自動織機

4季目のジャパンラグビー リーグワンは、ディビジョン1(D1)からディビジョン3(D3)まで、新規参入3チームを加えた26チームによって2024-25シーズンを迎えました。D1プレーオフトーナメントの出場チームは上位4チームから6チーム、リーグ戦は16試合から18試合に拡大し、リーグ全体では223試合を開催。期限付移籍制度導入など新たなフォーマットでリーグワンのフェーズ2がスタートしました。

シャトルズ愛知、D3はマツダスカイアクティブズ広島がそれぞれディビジョン初優勝を飾りました。

シーズンフィナーレとなるD1プレーオフトーナメント決勝は、昨年に続き国立競技場で5万人を超える観衆が見守るなか、東芝ブレイブルーパス東京がリーグ初の2連覇を達成。シーズンMVPもリッチー・モウンが選手が2年連続受賞の栄誉に輝き、シーズンを締めくくりました。



社会貢献活動の実施

ジャパンラグビーリーグワンは、昨年に続き能登半島における地震災害、および大雨災害の救援募金を実施しました。プレーオフトーナメントでの募金活動、6月末まで救援募金口座を開くなど、多くの協力を得て、寄せられた募金は日本赤十字社へ寄付しました。

プレーオフトーナメント決勝では、イベント会場・リーグワンヴィレッジにブースを設置し、昨年に続き、LGBTQ+の啓蒙活動を連携先のプライドハウス東京と協力実施しました。

また、今シーズンのNTTリーグワンアワードでは、選手が

選ぶ「プレーヤーズ・チョイス・プライズ」の社会貢献賞を、浦安D-Rocksが受賞しました。浦安D-Rocksでは、ホストゲームでの温室効果ガス排出に対し117.7トンのカーボンオフセットの実施や、スタジアムでは環境啓発や分別促進、廃油・衣類などの回収を通じた資源循環を推進しました。この他、がん治療研究支援の「deleteCマッチ」では、観戦アクションを寄付に変える仕組みを導入し、約72万円の寄付を実現するなど、スポーツを通じた社会貢献の新たなモデルを築いている点が高く評価されました。

Message



ジャパンラグビーリーグワン
業務執行理事(CRO)
福本 正幸

「おもしろい」リーグを目指して進化中!

今シーズンは試合数を増やし、ファンの方々に楽しんでいただける機会をつくりました。拮抗した見ごたえあるゲームが多く、ラグビーの質も高まっています。チームそれぞれの応援・観戦スタイルが定着し、「おもしろい」リーグに進化していると感じています。

V. 社会連携

「JAPAN RUGBY 2050活動指針」の中で、JRFUは「ラグビーが、世界一身近にある国へ」というMissionを掲げています。日本でラグビーが生活に根付き、誰もがラグビーに親しめる環境を整えるために、より身近に感じてもらう社会環境を構築し、ラグビーの価値が社会のさまざまな場面で活かされる世界を目指します。

誰もが安心して観戦できる環境に向けて

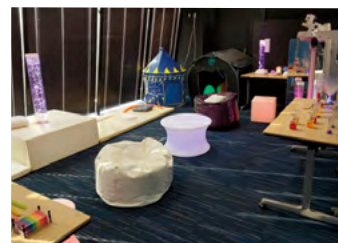
ラグビーが多くの人々の日常に溶け込み、文化や価値観として浸透していくことを目的として、さまざまな取り組みを行っています。

女子日本代表戦 試合会場でのセンサリールーム設置

「太陽生命 JAPAN RUGBY CHALLENGE SERIES 2024」日本代表vsアメリカ代表の試合会場で、発達障がいなどの診断を受けている感覚過敏などの症状のあるお子様とご家族が安心して観戦できるセンサリールームを設置しました。このルームでは、明る過ぎない照度と大音声や大音量を遮る防

音ガラスが設置されており、人混みや周囲の視線を避けた安心できる部屋で試合観戦を楽しむことができます。

設置目的の前提には、試合の見方や楽しみ方の「方法」が多数派とは違うだけで、「観る」「楽しむ」といった思いは同様であるとの考え方があります。今後も皆さまが安心してラグビーを観戦いただけますよう、共生社会の実現に向けた取り組みに努めてまいります。



Voice



業務推進部門 部門長補佐
寺廻 健太

社会変革の主体者になるために

ラグビーの持つ価値を改めて認識し、各種活動を通じてそれらを広めることで、より多くのステークホルダーの皆さまと繋がり、一緒に社会を変革していくことを目指します。

環境サステナビリティ推進宣言

気候変動問題への取り組み

JRFUは、世界的な気候変動問題へ取り組むため、10月、環境サステナビリティ推進を宣言し、国連の「スポーツを通じた気候行動枠組み (Sports for Climate Action Framework)」に署名しました。気候変動に関する国連気候変動枠組条約 (UNFCCC) 事務局によると、日本国内のスポーツ中央競技団体で「スポーツを通じた気候行動枠組み」への署名は当協会が初であり、ワールドラグビー加盟協会の中でも初めてのこととなりました。

環境サステナビリティプロジェクトKick Off ! in YOKOHAMA

10月26日(土)に日産スタジアムで開催した「リポビタンD チャレンジカップ2024」日本代表vsニュージーランド代表試合会場において、開催自治体である横浜市と連携した環境保全プロジェクトを実施しました。

来場者に環境問題について考えていただくきっかけづくりとして、フードドライブ(未使用の食品を寄付し、食の支援を必要とされている方々に届ける活動)など、環境保全に繋がるさまざまな取り組みを行いました。



V. 社会連携

スクラム・ジャパン・プログラム



2014年から協賛会員制度としてスタートした本プログラムは、全国のラグビー普及育成活動に繋げる「ハブ」としての役割を担っています。会員からの年会費を支部協会（関東協会、関西協会、九州協会）主催のミニラグビー、ジュニアラグビーの大会運営資金の一部として活用するほか、助成金による支援という形で全国の都道府県協会、市区町村協会の普及育成活動に寄与しており、2024年度は50件を超える支援を実施することができました。また、会員企業様との連携によるラグビー普及イベント会場の確保や、商材販売代金の一部をご寄付いただくなど、本プログラムと会員企業様双方の社

[WEB スクラム・ジャパン・プログラムはこちら](#)

会的価値向上に繋がる取り組みも積極的に推進しています。

今後は、協賛会員様を増やして「ラグビー普及ファンド」としての財務的価値を高めるとともに、会員企業様の事業・リソースとの連携を図り、そのノウハウを頂戴しながら、ラグビー普及のすそ野の拡大やラグビーのコアバリュー、教育的価値を広く知っていただく機会づくりに取り組んでいきます。

現在、54の会員企業様・団体様から本プログラムへの共感をいただいております、会員との関係維持継続とともに新たな会員募集を積極的に推進してまいります。



会員の皆さま、いつもありがとうございます

JRFU基金

[WEB JRFU基金はこちら](#)

JRFUが実施する右記の活動に対する寄付制度として、発足以来、延べ約5,000名の方から支援をいただきました。ラグビーを愛し、支援して下さる皆さまの芳志を、JRFUが進めるミッション、ビジョン、ターゲットの実現に繋げ、「ラグビーを通じた社会連携」の一役として推進してまいります。



ラグビーが、世界一身近にある国へ

JRFU基金

JRFU基金は以下を目的とした寄付の募集を行っています

JRFUの活動全体への協力

日本協会は2026年に100周年を迎えます！

ラグビーの普及と育成活動への協力

誰でも、いつでも、どこでも、ラグビーを楽しめる環境作りをご支援ください！

日本代表チームの一層の強化

今年はRWC2025（女子15人制）が開催され、トップ8以上を目指しています！



Voice



業務推進部門
三上 尚人

ラグビーへのご支援に
感謝致します

ラグビーを通じた社会貢献として多くの企業様・団体様から賛同をいただいているスクラム・ジャパン・プログラムや、ラグビーを応援して下さるファンの皆さまを中心にJRFU基金があります。ラグビーの価値をさらに高められるよう取り組んでまいります。

V. 社会連携

スポーツ外交推進事業

2024年度外務省「スポーツ外交推進事業」の一環として、JRFUIは、トンガ協会にラグビー用具を寄贈しました。本事業は、日本政府の「Sport for Tomorrow」の一環で、スポーツを通じた国際交流と協力を目的としています。寄贈品は日本代表チームや支部協会から提供されたもので、トンガとのラグビー交流の深化と2022年1月15日に発生したトンガ北部の海底火山フンガトンガ・フンガハアパイの大規模噴火からの復興支援の継続を目的としています。用具は主に学校やユース代表の練習で活用されます。



Voice



国際室長
飯島 康弘

国際的な視点からラグビーを通じた社会連携を

ラグビーを通じた社会とのエンゲージメント強化は、日本ラグビーが日本社会と国際社会でプレゼンスを発揮するために必要なことです。RWCが再び日本の地で開催される青写真を描きながら、さまざまなプロジェクトを進めてまいります。

ファン・サポーターとの関係構築

日本代表のファンやサポーターが年々増えていくなかで、ファン・サポーターと気持ちを一つにするための接点を質・量ともに強化していくことが重要になっています。

リポビタンDチャレンジカップ2024 直前決起会イベント 「みんなで超えていこう。ラグビー日本代表ファンミーティング」

10月26日(土)に日産スタジアム(横浜)で開催された「リポビタンDチャレンジカップ2024 日本代表vsニュージーランド代表」に先駆け、ファンの皆さまと勝利を誓う決起会イベント



として10月23日(水)に実施しました。このイベントでは、選手やHCと交流する座談会や、日本代表グッズが当たる抽選会を行うなど、ファンの方とのエンゲージメント強化に寄与できたイベントとなりました。

「PNCスタグル祭×ASAHI SUPER DRYテラス」の実施

大会タイトルスポンサーのアサヒビール様のアクティベーションとして、人気のキッチンカーが提供するバラエティ豊かな食事やドリンクをゆっくりお楽しみいただける「テラス」を実施しました。特設ステージ上では元日本代表選手によるトークショーやスペシャルイベントが行われ、来場者の満足度向上に寄与できる取り組みとなりました。

Voice



マーケティング部門長
富樫 正太郎

ラグビー日本代表のさらなるファンとの接点強化を

応援して下さるファンの方々や、支えて下さる協賛企業様とのさらなる関係強化は、日本ラグビーにとって、とても重要です。日本ラグビーが新たなステージに上られるよう、さまざまな視点で質・量の向上に努めたいと思います。

2章 ビジョンと戦略

JAPAN RUGBY 2050	21
取り組むべき3つの課題	22
中期戦略計画2025-2028	23
成長サイクル 競技力の強化	25
成長サイクル 収益力の強化	26
成長サイクル 関係人口の拡大	27
成長サイクル 基盤強化	29
特集 女子ラグビー 世界ーを目指して 対談 佐々木則夫×浅見敬子	31



JAPAN RUGBY 2050

JRFUでは、2021年に「中期戦略計画2021-2024」にて、「JAPAN RUGBY 2050」として、2050年に向けた日本ラグビーの成長戦略を定めました。これは、日本中を巻き込む大きな盛り上がりを見せ、ラグビー日本代表のみならず、ラグビー自体の価値を飛躍的に高める結果となった、RWC2019日本大会の成功を出発点に、長期視点に立った日本ラグビーの成長ストーリーとして策定したものです。この成果は、長年にわたり日本ラグビーに関わったすべての人たちの努力と貢献の上に成り立ったものであり、このレガシーを後世に残し、日本ラグビーをさらに発展させて行くことが、私たちの今後の使命となります。

「中期戦略計画2021-2024」で定義したこの活動指針に基づいて、これまでの4年間の取り組みを経て、「中期戦略計画2025-2028」では目指すべき方向性を改めて定義しました。

JAPAN RUGBYの使命(Mission)として、ラグビー競技者、支援者、ファンの皆さまが一体となり「ラグビーが、世界一身近にある国へ」を目指し、JAPAN RUGBYの未来像(Vision)として、協会組織の強化や、地域や社会との連携などを通して「世界のラグビーをリードし、スポーツを越えた社会変革の主体者となる」ための取り組みを進めることとしています。これらにより、JAPAN RUGBYが掲げる達成目標(Target)として、「再びワールドカップを日本に招致し、世界一になる」の実現を掲げ、世界一となることにより、ラグビーが日本全体に認知され、多くの社会的・経済的恩恵をもたらすことを期待します。

Mission

JAPAN RUGBYの使命

ラグビーが、世界一身近にある国へ

ラグビーが日本人の日常に溶け込み、文化や価値観として社会に浸透することを目指すため、4つの方向性を定めました。

1.

関係人口の拡大

2.

競技力の向上と
国際大会での成功

3.

ラグビーを身近に感じる
社会環境

4.

ラグビーが社会に
貢献する存在に

Vision

JAPAN RUGBYの未来像

世界のラグビーをリードし、
スポーツを越えた
社会変革の主体者となる

Target

JAPAN RUGBYが掲げる達成目標

再びワールドカップを
日本に招致し、世界一になる



取り組むべき3つの課題

「JAPAN RUGBY 2050」における活動指針にそって、私たちは「海外戦略」、「地域連携」、「ラグビーファミリーの拡充」という3つの課題に注力します。

これらの課題に取り組むことにより、「JAPAN RUGBY 2050」で示したMission、Vision、Targetの実現に繋げていきます。

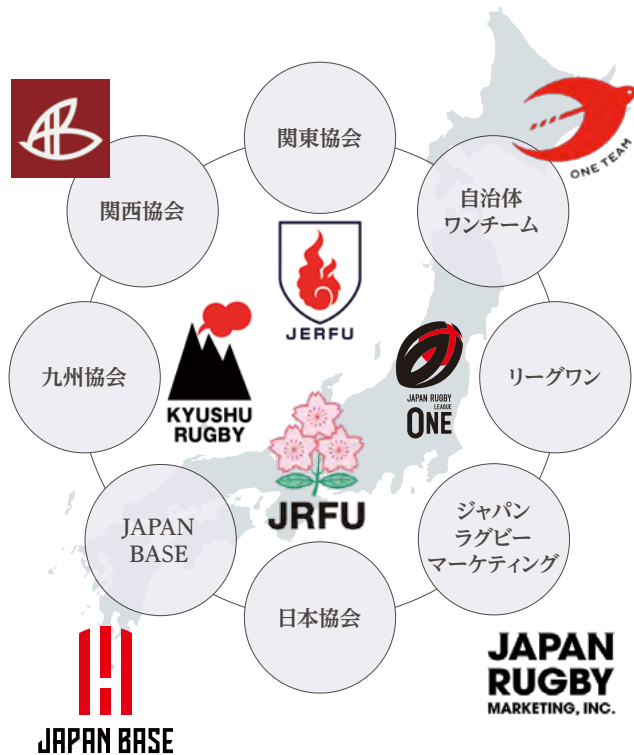
海外戦略

ハイパフォーマンスユニオンとして、ワールドラグビーや各ユニオンとの連携を深め、これまで以上の国際試合機会を得て、世界におけるJAPAN RUGBYのポジションをさらに高める



地域連携

ラグビーに関わるさまざまなステークホルダーが、地域同士などさまざまな関係性の中で、ベクトルを合わせ、心を一つにして進んでいけるよう、環境・仕組み・体制を整備する



ラグビーファミリーの拡充

コミュニティラグビーとプロラグビー、それぞれのパスウェイを確立して、誰もがいつでもどこでもラグビーを楽しめるよう、ハードルを低く、価値を高め、長く関われる環境をつくる



中期戦略計画2025-2028

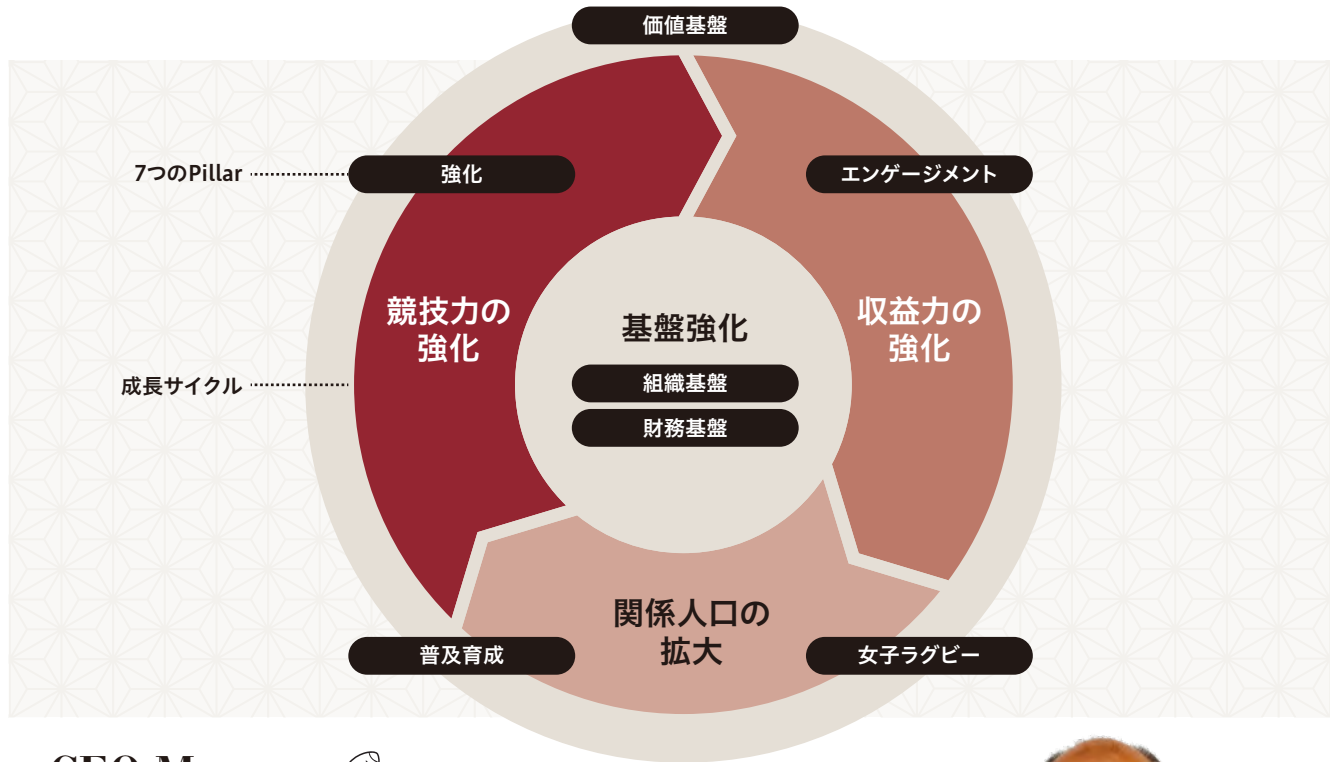
成長サイクルと7つのPillar

本計画の策定にあたっては、2023年11月から「中期戦略計画2021-2024」を検証して、課題を抽出した後、次の4年で目指すべきことなどについて、約1年を掛けて理事会、事業遂行責任者会、職員によるワークショップなど、さまざまな機会を設定し、幅広く議論を重ねてまいりました。これらを通して「中期戦略計画2025-2028」では、RWCの近い将来での招致を実現するため、下記4項目を大方針として掲げました。

1. 日本代表・リーグワンコンテンツによる収益化
2. プロラグビーとコミュニティラグビーそれぞれのパスウェイ確立・連携
3. 地域を主体としたラグビーのエコシステム整備
4. 360° エンゲージメント

この大方針の下、「競技力の強化」「収益力の強化」「関係人口の拡大」「基盤強化」という成長サイクルを設定し、さらにこれを7つのPillar（強化、エンゲージメント、普及育成、女子ラグビー、組織基盤、財務基盤、価値基盤）に分解しました。

WEB [中期戦略計画2025-2028はこちら](#)



CEO Message

JRFU100周年を契機とした環境・仕組み・体制の確立

2026年11月、JRFUは100周年を迎えます。この節目を契機とし、コミュニケーションの強化、相互の協力体制の構築により、リーグワン、ジャパンラグビーマーケティング、支部協会、都道府県協会に加え、自治体を含めたさまざまなステークホルダーがベクトルを合わせてJAPAN RUGBY2050へ向けて進んでいくための環境・仕組み・体制を構築していきます。

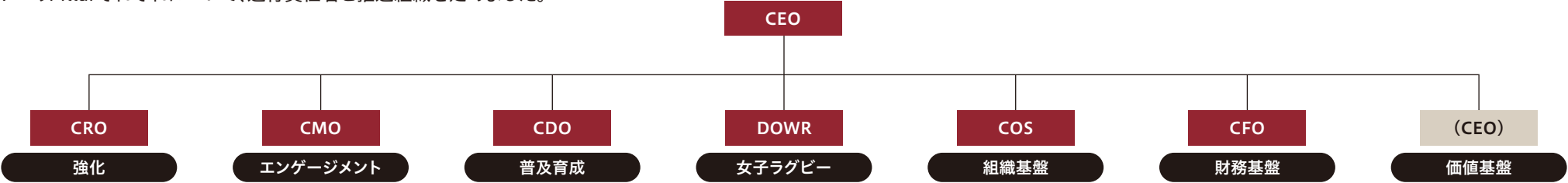
業務執行理事 最高事業統括責任者(CEO)
事業遂行責任者ラグビー担当(CRO)

山神 孝志



中期戦略計画2025-2028

成長サイクルについて、KGI(達成目標)を定めるとともに、
7つのPillarそれぞれについて、遂行責任者と推進組織を定めました。



成長サイクル	KGI(2028年度末時点の達成目標)		設定根拠
競技力の強化	RWC2025	ベスト8	これまでの競技成績をもとに、同大会において目指す目標をベスト8以上と設定した
	RWC2027	ベスト8定着	RWC2019日本大会においてベスト8は達成しているものの、今後は同大会において、継続的に目指す目標をベスト8以上定着と設定した
	2028ロス五輪	男女メダル獲得	これまでの競技成績をもとに、同大会において目指す目標を男女ともにメダル獲得(3位以上)と設定した
収益力の強化	総収入	100億円 (CMO管轄で70億円)	ジャパンラグビーマーケティングとの連携を前提に、中期財務計画との整合性・他国ユニオンの目標設定などを踏まえ、目指す目標をジャパンラグビーマーケティングを含む総収入100億円以上と設定した
	Japan Rugby ID	50万人	JRFUの全サービスのファン基盤(現在約22万人)であることから、ID移行へのインセンティブをつけて、目指す目標を50万人以上と設定した
関係人口の拡大	プレーヤー	10万人 (うち女子8,500人)	プレーヤー(女子は全プレーヤーの内数)・登録者(指導者・レフリー・役員等)・体験者の3層で、それぞれ目指す目標を設定した
	登録者	12万人	
	体験者	120万人	
基盤強化	エンゲージメント指標	(2025年度設定)	2025年度中に1回目調査を実施した上で2028年度末のゴールを設定する
	一般正味財産	残高20億円	安定した財務基盤を実現するため、目指す目標を2018年度以来の一般正味財産残高20億円以上と設定した

「中期戦略計画2025-2028」においては、分割した7つのPillarそれぞれに推進責任者を明確に配置しました。これにより、各Pillarの推進体制と実際の事業遂行体制を一致させ、各Pillarの責任の所在と実行の主体を同一化することで、計画の実効性を高めています。

また、成長サイクルの進捗を把握するために、2028年度末における達成目標として定量的な数値目標(KGI)を明確に設定しました。さらに、このKGIを実現するための各Pillarの具体的な達成指針としてKPIのほか、このKPIを達成するためのキーとなるアクションアイテムを定めることにより、目標と実行の連動性を確保しています。これらにより、一貫性を保ちながら、定期的な進捗確認と軌道修正が可能な運営体制を構築しました。

なお、計画の進捗状況については、各ステークホルダーへの説明責任を果たすため、アニュアルレポートを通じて報告することを予定しています。また、2年後に計画の前提条件や目標値を見直すことも想定しており、環境変化に柔軟に対応しながらも中長期的な方向性を維持するアプローチを実践します。

中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 競技力の強化

商品・サービスの根幹であるラグビーの試合価値を高めるため、強豪国と互角に対戦できる競技力を獲得する

このサイクルにおけるKGI

- RWC2025: ベスト8
- RWC2027: ベスト8定着
- 2028ロス五輪: 男女メダル獲得

関係するPillar

強化

MISSION 1 日本代表15人制・セブンズの競技力を向上させ、国際大会(RWC・オリンピック)での活躍をステークホルダーの共感につなげ、永続するスポーツとして更に成長を目指す

MISSION 2 競技力向上の環境基盤として、世界水準のレフリー・コーチ輩出、プレーヤーウェルフェア整備を進める

KPI		主なアクション
プレーヤー強化	15人制 男子	世界ランキング10位 代表キャップ数600
	15人制 女子	世界ランキング8位
	7人制	7'sシリーズ定着 (M7定着・W7トップ8定着)
レフリー・指導者育成・強化	レフリー	RWCレフリー1名輩出 オリンピックレフリー1名輩出 フルタイムレフリー6名育成
	コーチ	ハイパフォーマンスコーチの 発掘と育成

Message



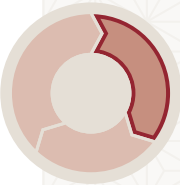
女子日本代表HC
レスリー・マッケンジー

RWC2025に向け、
毎日刷新しています

同じ川に二度入ることはできない。同じ川はなく、我々も同じ人間ではないから。昨年度、チーム全員が日々新しい川に踏み込む姿を目撃できたことは大きな喜びでした。ワールドカップの夢に向けて、刷新と向上に努めております。家族、友人、クラブ、企業の皆様のご支援に感謝し、パフォーマンスに全力を尽くします。



中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 収益力の強化

ラグビーへの興味喚起を行い、ラグビーを好きになるファンを増加させる
ラグビーコンテンツを活用して、投資回収し持続的な協会運営を行う

このサイクルにおけるKGI

- 総収入:100億円
- Japan Rugby ID:50万人

関係するPillar

エンゲージメント

- MISSION 1 さまざまなファンとのタッチポイントを増やし、ラグビー全体のファンを増やすこと
- MISSION 2 ラグビーコンテンツ力をより多様化させ、持続可能なスポーツであるために必要な資金を獲得すること

KPI		主なアクション
入場料	年間20億円	<ul style="list-style-type: none">● パートナー企業向けのホスピタリティパッケージの開発● サービスメニューの拡充
放映権料	年間10億円	<ul style="list-style-type: none">● 国内における露出の拡大● 海外における露出の拡大
協賛金	年間30億円	<ul style="list-style-type: none">● 新たなメニューの開発● 新たな協賛の仕組みの設定
JRID・ファンクラブ	5万人&5億円	<ul style="list-style-type: none">● システム刷新による会員制度の再設計● 親子で登録できる仕掛けの導入

CMO Message



事業遂行責任者
マーケティング担当(CMO)
牧 健

ラグビーを観戦するという体験の創出から、ラグビーに興味を持ってもらうまでの仕組みを、分析を通して、より精度を上げていきたいと思っています。
強い代表チームのブランドはもちろんですが、勝敗に左右されない、最適なコンテンツを、さまざまなプラットフォームで提供していくことで、協賛、放送、興行の価値全体を高めていきます。



中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 関係人口の拡大

回収した収益によって、全世代のラグビー関係者を獲得する再投資を行う
ラグビーを楽しめるように、ハードルを低くし、価値を上げ、長く関われる環境をつくる

このサイクルにおけるKGI

- プレーヤー: **10万人**(うち女子8,500人)
- 登録者: **12万人**
- 体験者: **120万人**

関係するPillar

女子ラグビー

- MISSION **1** 女子ラグビー中長期戦略計画で定めた方針、持続的なパスウェイ構築、コミュニティ構築、リーダーシップ育成を達成すること
- MISSION **2** 日本代表15人制・7人制の競技力の向上に寄与し、国際大会(RWC・オリンピック)での活躍をステークホルダーの共感につなげ、永続するスポーツとしてさらに成長を目指すこと

KPI		主なアクション
近隣県同士の交流活動	12地域での実施	● 実態把握 ● 隣県交流会の開催促進
平均入場者数	5,000人*1	● 女子ラグビーの独自コンセプト策定 ● 日本協会主催大会のプロモーション強化
平均同時視聴者数	800人*2	
支部協会・都道府県協会 女性理事数	1名以上	● D&I宣言の推進 ● キャリアセミナー開催

*1 日本代表戦1試合あたり、太陽生命WSS1大会あたりの入場者数

*2 太陽生命WSS2024平均同時視聴者数400人

DOWR Message



事業遂行責任者
女子ラグビー担当(DOWR)
香川 あかね

女性がラグビーを生涯スポーツとして楽しめるように、女子中長期戦略計画の3つの重点領域である、パスウェイ構築、コミュニティ構築、リーダーシップ育成に、全国の女子ラグビー関係者の皆さまとともに、継続的に注力してまいります。



中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 関係人口の拡大

関係するPillar

普及育成

MISSION 1 誰もがいつでもどこでも、ラグビーを楽しめるように、ハードルを低くし、価値を上げ、長く関われる環境をつくること

KPI			主なアクション
プレーヤー	登録プレーヤー数	88,000人	● プレー環境の整備 ● ゲーム機会の拡充 ● 部活動の地域展開 ● 女性プレーヤーの環境整備 ● プレーヤーウェルフェア
	SMBCカップ参加者数	12,000人	
	プレーヤー継続率	(2025年度以降設定)	
	地域大会の開催数	(2025年度以降設定)	
	プレー環境の整備	(定性目標)	
登録者	コーチ資格者数	13,000人	● 全世代パスウェイの構築 ● プレーヤーやチームを支える人の質の向上 ● 女性がラグビーに関わる機会の創出 ● コーチの質の向上 ● レフリーの質の向上
	レフリー資格者数	(2025年度以降設定)	
	登録役員数(Safety Assistant(SA)、マネジャー他)	11,000人	
	登録者の満足度	(2025年度以降設定)	
	全世代パスウェイの整備	(定性目標)	
体験者	ノンコンタクトラグビープログラム	(定性目標)	● ノンコンタクトラグビーの拡充 ● 多様な機会づくり ● 教育におけるラグビーの推進 ● ラグビー価値のプロモーション ● 国際協力プログラムの推進
	体験会およびイベントの参加者数	30,000人	
	学校教育におけるタグラグビー体験者	1,100,000人	
	SNSフォロワー数	3,000人	
	JAPAN RUGBY TV(普及育成関連)視聴者数	350,000人	
普及育成活動の推進体制強化	JRFU普及予算	5億円 or JRFU全体予算の5%	● 地域における普及育成戦略計画の推進 ● 財源の確保 ● 組織基盤 ● 普及育成情報の発信 ● 登録制度・システムの改善と管理
	スタッフ数	職員13人、専門官9人、RDO14人	
	RDO配置数	11エリア+3地域	
	支部協会、都道府県協会の役員数	(2025年度以降設定)	

CDO Message

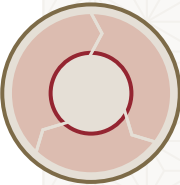


事業遂行責任者
普及育成担当(CDO)
安井 直史

普及育成のミッションを達成するためには、支部協会、都道府県協会をはじめ、多くの関係者の方々との連携をとっていくことが重要なカギとなるので、コミュニケーションを重ねて、幅広い事業に取り組んでまいります。



中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 基盤強化

日本協会が、すべてのラグビー関係者から信頼され、
ラグビーの全国的な持続的発展を可能にする、仕組みが確立されている
日本協会が提唱するラグビーの価値を定義し、ステークホルダーへ届けられている

このサイクルにおけるKGI

- エンゲージメント指標
- 一般正味財産:20億円

関係するPillar

組織基盤

- MISSION 1 職員のスキルレベルの向上・職場環境整備の他、業務プロセスの改革を行い、
プロフェッショナル組織として高いエンゲージメントと生産性を引き出すこと
- MISSION 2 支部協会・都道府県協会、リーグワン、ジャパンラグビーマーケティング、自治体などの
外部ステークホルダーとの連携を強化し、同じベクトルのもと、
持続可能なラグビー発展のエコシステムを構築すること

KPI		主なアクション
1人あたりの経常収入	85百万円	<ul style="list-style-type: none">● 職員の就業環境改善とスキルアップ・キャリアアップ支援● 戦略達成のために必要な組織整備と役割明確化● 業務改革(BPM)とシステム化(DX)への取り組み
全国都道府県協会の収入額	100百万円増加	<ul style="list-style-type: none">● 支部協会・都道府県協会とのコミュニケーションの強化
自治体と都道府県協会との 連携事業の事例数	毎年47件	<ul style="list-style-type: none">● リーグワン、ジャパンラグビーマーケティングなどとの連携推進の仕組みづくり● 自治体ワンチームとの連携強化● 自治体と都道府県協会の連携の支援
自治体ワンチーム加盟自治体	全都道府県の加盟	

COS Message

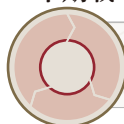


事業遂行責任者
総務担当(COS)
中里 裕一

組織の高度化とともに、生産性と効率性の向上を同時に進めます。また、支部協会および都道府県協会との連携を強化すべく、構造改革を進めると同時に、自治体をはじめとしたステークホルダーと地域組織との連携を進めてまいります。



中期戦略計画2025-2028



成長サイクル 基盤強化

関係するPillar

財務基盤

MISSION 1 未来への投資に向けた財務基盤を確立すること

MISSION 2 一般正味財産（純資産）の健全な積み上げを実現すること

KPI		主なアクション
一般正味財産の積み上げ	10億円（単年度2億円以上）	<ul style="list-style-type: none"> ● 投資の効果測定ルール明確化 ● 支出ガイドラインの策定
		<ul style="list-style-type: none"> ● 予算管理の短サイクル化 ● 会計システムの改修

関係するPillar

価値基盤

MISSION 1 事業活動を通して、ラグビーの価値を考えること、守ること、高めること、伝えること

MISSION 2 コアバリューの啓発を推進するとともに、ラグビーの価値を広く社会に伝え、永続するスポーツであり続けること

KPI		主なアクション
ラグビーの価値を考える	コアバリューに関わる概念整理	<ul style="list-style-type: none"> ● コアバリューに関わる概念整理 ● JRFU100周年に向けたコンセプト策定・観測
ラグビーの価値を守る	不祥事案・重症事故：ゼロ	<ul style="list-style-type: none"> ● ルールの見直し ● 研修活動
ラグビーの価値を高める	（2025年度設定）	<ul style="list-style-type: none"> ● 環境サステナビリティ推進体制の構築 ● D&I推進宣言に関わる取り組みの推進
ラグビーの価値を伝える	（2025年度設定）	<ul style="list-style-type: none"> ● ラグビーの価値に関わる情報発信の実施

CFO Message

事業遂行責任者
財務担当(CFO)
重 博人

事業拡大に対して効率的な収支・投資管理を目指すとともに、各種法令や会計基準に準拠した適正な会計処理を追求してまいります。その上で将来の投資に向けた安定的かつ健全な財源の積立を実現していきます。

Voice

リスク・ガバナンス室長
鈴木 海太改めて考える
ラグビーの価値

価値基盤は、成長サイクル全体をカバーする領域です。ラグビーが世界一身近な国になることを目指して、ラグビーの価値を守り、さらに高め、それをどのように伝えていくのか、皆さんとともに考えて、次のアクションに繋げることが大切です。

JRFUでは女子ラグビー中長期戦略計画で
長期的な視点から女子ラグビーが進むべき道を定め、
RWCの近い将来での招致を実現するために、
女子ラグビーの競技力アップと普及育成に取り組んでいます。
そこで、2011年にドイツで開催された女子サッカーワールドカップにおいて
なでしこジャパン監督としてサッカー女子日本代表を世界一に導いた
佐々木則夫氏をお迎えし、女子サッカーと女子ラグビーのこれまでとこれからについて、
浅見敬子副会長と熱く語っていただきました。
(聞き手:株式会社ブレインセンター 平石隆生)

女子ラグビー世界一をめざして

佐々木 則夫

浅見 敬子

特集 対談

SASAKI NORIO

ASAMI KEIKO

公益財団法人日本サッカー協会 女子委員会 委員長
佐々木 則夫(ささき・のりお)氏

1958年、山形県生まれ。帝京高校、明治大学、大宮アルディージャの前身となる電電関東/NTT関東サッカー部でプレー。2006年、サッカー日本女子代表コーチに就任し、2007年より監督。北京オリンピック(2008年)では4位入賞、2011年の女子W杯ドイツ大会では優勝を果たし、ロンドンオリンピック(2012年)では銀メダル獲得、2015年の女子W杯カナダ大会では準優勝に導いた。2019年、日本サッカー殿堂入り。2021年に開幕した女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」の発足に際しては準備室長として尽力。2021年12月より現職。

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会 副会長
浅見 敬子(あさみ・けいこ)氏

1977年、東京都生まれ。日本体育大学在籍時に15人制女子日本代表に初選出。2000年にはニュージーランド留学を経験した。日本代表として、15人制で11キャップ、7人制で4キャップを獲得。2007年に現役引退後、15人制女子日本代表コーチに就任。その後、7人制女子日本代表コーチ、同ヘッドコーチ、女子セブンズユースアカデミー ヘッドコーチ、同女子日本代表テクニカルディレクターと、主に女子日本代表の強化に関わっている。2017年にJRFU理事、2018-19年にワールドラグビー理事、2021年より副会長(現職)。

競技の枠を超えた共創と地域・社会との連携で、存在価値を高めていく。

代表強化を支えた戦術と精神力

—はじめに、世界の強豪チームと伍するため、代表チームを強化するポイントとは

浅見 よく問題にされるのが、体格の差です。佐々木さんは世界一を手にしたとき、体格面の不利な状況を、どのように克服しようと考えられたのでしょうか。

佐々木 戦術面で考えたのは「機動力」です。もともと「速さ」はありましたが、ゲームで活かされていなかった。そこで、日本女性の特徴である「目配り」「気配り」と連携させ、相手の予測より一歩早く判断し、スピーディに対応できる力を養いました。

浅見 当時、選手たちの「ひたむきさ」も話題になりましたよね。マインドの部分では、どの

ようなことを意識されたのですか？

佐々木 選手たちが肌で感じていたのは、男子サッカーと女子サッカーに対する評価の差です。そこで彼女たちが率先して取り組んだのが、女子もサッカーがうまくプレーできることを証明し、しかも実力の高さを魅力的に伝えて、世の中の評価を高めることです。さらに、自分たちの活躍を見てサッカー女子が増え、社会がサッカー女子を評価することも目指しました。

浅見 7人制女子ラグビーでは、2016年のリオデジャネイロオリンピック出場権を獲得するため、とても厳しい練習に励みました。これを耐え抜く支えになった一つが、なでしこジャパンが大切にされていたひたむきさ、がむしゃらにやるというマインドセットの部分でした。この時の想いは、今もチームに根付いていますか？

佐々木 想いを伝授されたベテランが、若手に伝えています。たまに澤さんも顔を見せて、「忘れちゃダメよ」とコミュニケーションを図っています。

“ サッカー女子が増え、社会がサッカー女子を評価することも目指しました ”

佐々木 則夫

“ 競技の発展・強化には、セカンドキャリアの環境も重要だと考えています ”

浅見 敬子

浅見 女子ラグビーでは、7人制日本代表の兼松由香HCが「繋」という漢字をキーワードに掲げて選手たちに想いを伝えています。女子ラグビーには、これまで桜のジャージを大事にしてきた先輩たちがいる。そして後ろには、自分たちに続く選手たちがいる。その選手たちに、大切な想いが込められた桜のジャージをしっかりと繋げていこうと伝えています。

国内リーグの充実も重要な要素に

—日本代表選手のパスウェイと国内大会のあり方、引退後のセカンドキャリアについて

佐々木 海外でプレーする選手が代表合宿に合流すると、普段から外国選手と競い合っただけの高めた対応力を代表チームに還元し、代表強化に繋がる手応えを感じましたね。

浅見 15人制の女子ラグビーでは、より質が高く、厳しい環境の中で自らを鍛え、成長するために海外チームへ移籍する選手が増えています。一方、7人制は状況が全く異なります。国内開催の「太陽生命ウィメンズセブンズシリーズ」は試合数が多く、レベルアップを図れる有効な機会として、世界が注目しています。その結果、海外チームの代表レベルの



選手が数多く日本のクラブに所属し、一緒に練習・試合をすることで、日本人選手のレベル向上に繋がっています。

佐々木 日本の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」も若手が第一線で活躍し、アンダー世代の質向上に貢献しています。ただ、課題になっているのが、代表の中心選手が少ないことです。今のお話から太陽生命シリーズを参考にさせてもらい、WEリーグの今後のあり方を検討したいと思いました。

浅見 もう一つ、競技の発展・強化には、現役時代に培った能力を引退後も活かし、ラグビー関連の仕事で長く活躍して頂けるよう、セカンドキャリアの環境拡充も重要だと考えています。そこでRFUでは「ハイパフォーマンスコーチアカデミー」を設置し、国際大会で活躍できる女性指導者の育成を進めています。このほか、ロールモデルになる女性のレフリー、トレーナー、アナリストも増えていきます。ラグビーは多くのスタッフが関わる競技なので、現役引退後もラグビー関連の仕事に



“数々の壁を乗り越えてきた背景には、
いつも自分らしく挑戦する姿がありました”

佐々木 則夫

携われるチャンスが数多くあります。この環境をさらに充実させて魅力的な将来を整備することにより、現役時代は全力で競技に取り組めることが、女子ラグビーの発展には必要だと考えています。

佐々木 サッカーも、指導者とレフリーの育成に注力しています。携わるにはライセンスが必要になることから、現役時代に必要ライセンスが取得できる環境を整備しています。セカンドキャリアとして、国内外のクラブや協会希望業務に携われる場の提供に取り組んでいます。

女性スポーツの発展に向けた取り組み

—なでしこジャパンのパーパス「BE YOUR BEST SELF～自分らしく挑戦する象徴である」、この言葉が生まれた背景は

佐々木 なでしこたちが数々の壁を乗り越えてきた背景には、いつも自分らしく挑戦する

姿がありました。この姿こそ、なでしこが変わらない価値であり、存在意義であると考えたからです。

浅見 とても素敵な言葉ですね。直感的に、そう思いました。

佐々木 サッカーを通じて高めた能力を、今後は人生のさまざまなシーンで自分らしく発揮し、存在価値を高め続けてくれることを期待しています。

浅見 私も、競技は人生をより豊かにする手段の一つだと考えています。選手たちには、目の前にあるラグビーで得た経験を活かしてほしいと、常に考えています。今回、その一つとして、7人制のユースアカデミーで日本代表OGの鈴木彩香さんに話をしてもらうことが決まりました。彼女は選手として海外に挑戦ただけでなく、結婚、出産、子育て、そして解説業と、さまざまなことを経験しています。それらの経験を「若い選手たちに伝えたい」と彼女から提案があり、意気投合して実現することになりました。

佐々木 鈴木さんの話をきっかけに、若い選手たちの人生に対する視野が広がりそうですね。女子ラグビーに取り組む魅力、新たな価値の認識が期待できるのではないのでしょうか。

—女子スポーツを社会に根付かせるために、必要なことは

佐々木 日本のスポーツ文化で大きな特徴だと感じているのが、幼い頃からさまざまな競技に取り組めることです。この環境を最大限に活かしてもらい、経験したなかから興味を持った競技に親しみ、長く続ける習慣が定着するといいですね。

浅見 私もそう思います。その観点から考えると、数年前にJFA夢フィールドで開催された異競技交流イベントは有意義でしたよね。普段はサッカーを楽しんでいる女の子たちが、ラグビーボールを手にして楽しそうにプレーしていました。子どもたちがさまざまな競技と接し、親しむきっかけになったと思います。

佐々木 JFAでは、こうした環境を、これからも積極的に提供していこうと考えています。

浅見 異競技交流イベントは、さまざまな競技団体とのネットワークが構築できるというメリットももたらしてくれました。最近の競技団体は、理事を含めて働く女性が増えています。そこで、バックオフィスにも目を向けて、競

技の枠組みを飛び越えた意見交換を行い、女性スポーツを根付かせる新しい扉を開いていけたらいいなと思っています。

社会・地域との関わりを重視した活動を推進

—スポーツ界が取り組む社会貢献、地域連携、その先にあるもの

佐々木 Jリーグが発足するとき、各クラブは地域に根ざすというヨーロッパスタイルを継承し、地域と連携した取り組みを大切にしてきました。WEリーグも、地域連携を重視しています。JFAは今後もブレることなく、地域連携を推進していきます。

浅見 女子ラグビーも、各クラブが地域と連携した活動を積極的に行っています。また、15人制の代表選手は練習や試合に臨むとき、全員がマイボトルを持参しています。これは、レスリー・マッケンジーHCの提案が起点

“ラグビーで得た経験を活かし、
人生の豊かさを手にすることを考えてほしい”

浅見 敬子



となり、チーム全員で環境負荷の低減に貢献したいと考えたからです。

佐々木 それはラグビーファンを巻き込み、環境問題の改善に貢献する素敵な取り組みに発展しそうですね。また、私が以前からラグビー界で注目しているのは、ジャッジメントに対する真摯な姿勢です。ジャッジに疑問を抱いたとき、キャプテンがレフリーと冷静に会話して理解に努め、チームに納得を促す。この対応は、社会のお手本になるものだと言っています。

—最後に、全国各地で女子ラグビーに携わるすべての方々へのメッセージをお願いします

佐々木 今回の対談を通じて、改めてラグビーの素晴らしさを理解し、見習いたいこと

にも気付きました。また、ラグビーとサッカーは“きょうだい”ですから、ボールを運ぶこと、蹴ることの楽しさを、より多くの少年少女に感じてもらい、長く親しんでもらえる環境を、フットボール仲間として一緒に提供していきましょう。

浅見 佐々木さんのお言葉から再確認できたラグビーの良さを、とことん伸ばしたいと思いました。そのために、フットボール仲間であるサッカーとの共創とともに、女子ラグビーに携わる方々との関係性を、これまで以上に深めていく必要性も感じました。代表選手がひたむきに競技と向き合い、プレーできるのは、女子ラグビーを盛り上げようと尽力されている皆さまのご支援があればこそだと理解しています。本日はありがとうございました。



COLUMN 意見交換会を実施しました

ますます楽しみになった女子ラグビー

対談終了後、佐々木様と女子ラグビー事業に携わる職員との意見交換会を実施しました。

佐々木様からは、女子代表のトップチームが結果を出すことが普及においては重要であることや、アンダー世代の試合環境の構築、女子代表の選手によるメディア対応のあり方など、サッカー女子日本代表との比較を通じた具体的かつ貴重なご意見をいただきました。

特にサッカー女子日本代表が2011年にワールドカップで優勝した後、その勢いを普及・発展にうまく活かせなかった反省から、現在のラグビーの勢いを活かすためにメディアの活用が必要であるとお話いただくなど、今後の女子ラグビー事業の方針に有効な提言も頂戴しました。

また「サッカーとラグビーはきょうだいのような存在で、もっと連携が必要である」と継続した交流についてご意見をいただき、今後の発展に向けた活発な意見交換の場となりました。



女子スポーツとして
どのような共通目標を
掲げるか

女子ラグビー戦略推進担当
田村 彩子

女子サッカーと女子ラグビーという異なる競技でありながら、その根底に「女性がスポーツを通して自己実現し、社会で活躍する力を得ること」という普遍的な目標が存在し、その共通認識が得られたことは、非常に意義深いと思います。



「サッカーとラグビーは
きょうだい」に勇気をい
ただきました

女子ラグビー戦略推進担当
石原 夢花

フットボールを起源とするサッカーとラグビーはきょうだいのような存在であるというお言葉を聞き、女子ラグビー界と女子サッカー界で悩みや喜びを共有し、協働し、お互いにとって有益な交流を続けていきたいと、改めて感じることができました。



3章 ガバナンス

コーポレートガバナンス	36
ガバナンスコードへの対応	37
コンプライアンス・インテグリティ	38
支部報告	39
表彰受賞者	40
スポンサー	41



コーポレートガバナンス

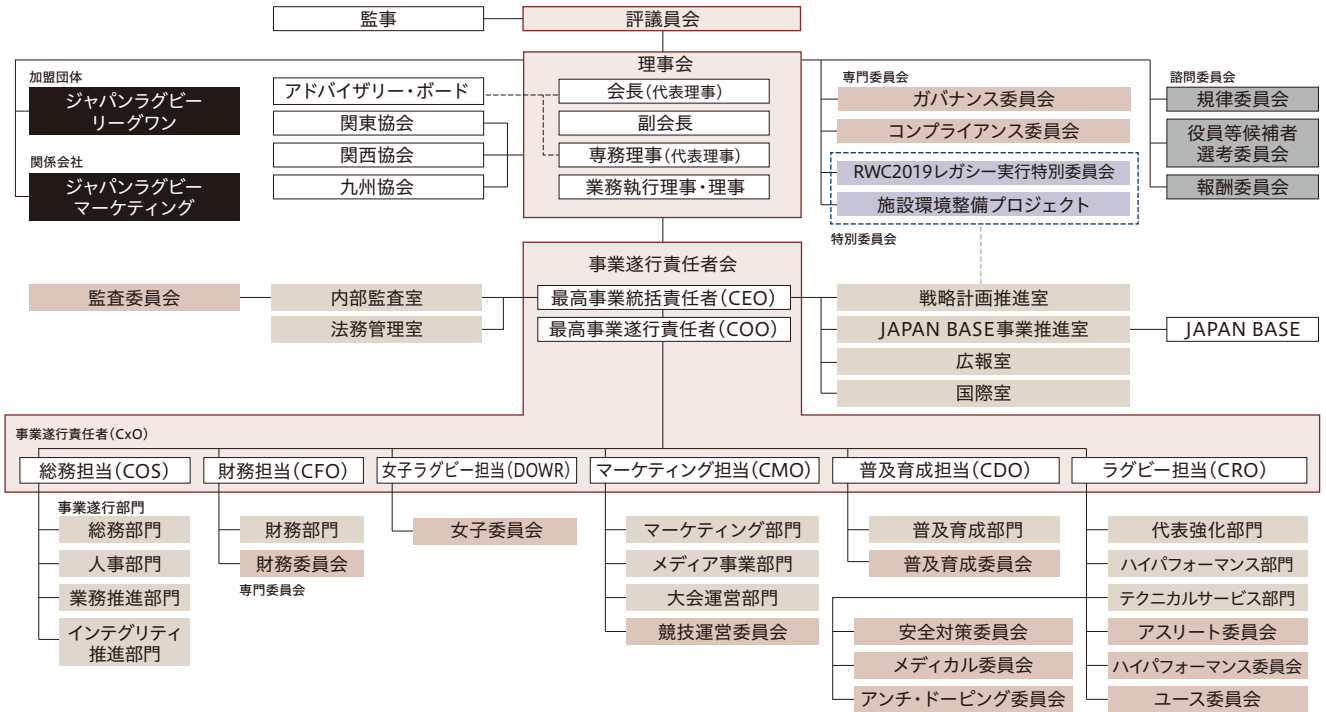
JRFUでは、より迅速な意思決定を図ることを目的に、2020年7月、理事が担当領域を持つ担当理事制と事務局を廃止し、業務の監督(理事会)と執行(事業遂行部門)を分離した体制としております。

この体制に関する基本的な考え方として、理事会は法令上必要な事項と重要な業務執行を決定し、その執行を監督します。決定された業務は、その執行を担当する理事および業務遂行理事を含む事業遂行部門がそれを執行します。各委員

会については、それぞれの機能に基づき、位置づけを明確にすべく、特別・諮問・専門の3委員会に区分しています。意思決定・業務執行・業務の監督という協会全体の機能の観点から、執行に関わる委員会は事業遂行部門に、監督に関わる委員会は理事会に紐づく組織体制としています。

これらの考え方に沿った上で、業務執行理事の権限を明確にするとともに、事業遂行責任者会として、事業遂行各組織(部門・室)を管掌・統括する事業遂行責任者を配置しています。

組織図



役員一覧

会長 (代表理事)	土田 雅人		
副会長	浅見 敬子 木下 康司 清宮 克幸 水越 豊		
専務理事 (代表理事)	岩淵 健輔		
会計役	鈴木 彰		
理事	Mark Egan	石原 直子	江田 麻季子
	香川 あかね	御領園 昭彦	斎木 尚子
	境田 正樹	座間 美都子	玉塚 元一
	中村 明彦	浜本 剛志	松原 忠利
	三好 美紀子	安田 結子	山神 孝志
監事	打田 光代 袖山 裕行		

(五十音順)

事業遂行責任者会 (*は理事)

共同最高事業統括 責任者(co-CEO)	岩淵 健輔* 山神 孝志*		
事業遂行責任者	総務担当(COS) 中里 裕一		
	財務担当(CFO) 重 博人		
	女子ラグビー担当(DOWR)		
	香川 あかね*		
	マーケティング担当(CMO) 牧 健		
	普及育成担当(CDO) 安井 直史		
事業遂行責任者	ラグビー担当(CRO) 山神 孝志(兼)		

組織図、役員一覧、事業遂行責任者会は2025年3月31日時点のものです

ガバナンスコードへの対応

2024年度自己説明

不祥事の発生を防ぎ、スポーツの価値を一層高め、スポーツ団体の適正なガバナンスを確保するため、ガバナンスコードが定められています。中央競技団体では13原則43項目について、毎年1回の自己説明を実施することが求められ、4年に1度、適合性審査が実施されており、JRFUは2022年度に受検し、適合の評価をいただいています。

ガバナンスコード対応に向けて取り組むことで、現時点の不安要素が把握でき、未然防止に向けた取り組みを行うことが可能になります。ラグビーの価値を一層高めるため、ガバナンスコードへの対応はそのスタートラインに立ったに過ぎません。真摯にかつ忠実に取り組むことが重要であると考えています。

 「遵守状況の自己説明」はこちら [2024年10月9日更新](#)



スポーツ団体ガバナンスコードとは

- 一般的にガバナンスコードとは組織・団体が活動が続けていく上で遵守すべき基準や規範を指します。競技の普及、競技力向上、大会開催などの取り組みはスポーツ団体を中心に行われており、各団体の適切な組織運営が求められています。
- 中央競技団体に対しては、4年に1度、ガバナンスコードの適合性審査運営規則に基づき、統括3団体（日本スポーツ協会、日本オリンピック委員会、日本パラスポーツ協会）による適合性審査が実施されています。統括3団体は適合性審査結果をスポーツ庁が運営する円卓会議へ報告し、結果を各中央競技団体へフィードバックするスキームとなっています。

ガバナンスコード（中央競技団体向け）の13原則

原則1	基本計画の策定・公表	中長期基本計画・人材計画・財務計画の公表など
原則2	役員等の体制整備	女性理事の割合・役員の新陳代謝を図る仕組みなど
原則3	必要な規程の整備	代表選手の権利保護、審判員の公平な選考など
原則4	コンプライアンス委員会の設置	コンプライアンス委員会に弁護士等の有識者を配置など
原則5	コンプライアンス教育の実施	職員・選手・指導者・審判員向けの教育実施など
原則6	法務・会計等の体制の構築	会計原則の遵守、補助金の適切利用など
原則7	適切な情報開示の実施	財務情報、選手の選考基準の開示など
原則8	利益相反の適切な管理	職員・選手・指導者間の利害相反管理・ポリシー作成など
原則9	通報制度の構築	通報窓口を設けて、相談内容に守秘義務を課すことなど
原則10	懲罰制度の構築	禁止行為、処分対象者・処分手続／内容を定め周知など
原則11	紛争の迅速かつ適切な解決	スポーツ仲裁機構の利用が可能であることを処分者へ通知など
原則12	危機管理・不祥事対応体制の構築	マニュアル作成、不祥事発生後の調査体制構築など
原則13	地方組織等への指導・助言・支援	地方組織との権限関係の明確化・支援体制の確立など

コンプライアンス・インテグリティ

基本的な考え

インテグリティはラグビー憲章内でもうたわれる価値観で、ラグビーに関わるすべての人々に共有されるべきものです。コンプライアンス、アンチ・ドーピング、安全・安心なラグビー環境整備の観点で改善を繰り返し、インテグリティ向上に努めています。

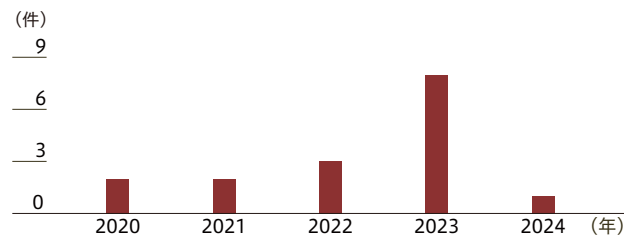
事業報告

違反事例および通報件数

2024年度は「倫理および処分規程」に基づく処分が1件(3名)ありました。違反内容は、「競技の円滑な運営を妨げる行為」として、報告されています。

また、インテグリティ相談窓口への通報件数は、3月末時点で15件あり、そのうち8件がラグビースクールで発生した不祥事案に関わる通報となっています。また、これらの通報内容としては、指導者から選手に対して行われたハラスメントに関するものが多く、JRFUとしても重大な課題と捉え、発生の抑制に向けて取り組んでいます。

直近5年間の処分件数の推移



※上記件数は、相談窓口等に寄せられた事案から事実調査、処分審査を経て理事会で決議した処分件数の推移になります。事案発生から処分に至るまで年度をまたぐケースも多くあります。

ドーピング検査

公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構(JADA)と連携し、2024年度は合計107検体を採取し競技会検査を実施しましたが、国内のラグビー選手に対するドーピング検査で陽性例はありませんでした。

安全対策への取り組み

「安全なラグビーの実現」、「重症事故ゼロ」を目標に、さまざまな取り組みを行っています。ラグビーにおける安全管理の重要性を指導者、プレーヤーに理解してもらい、日々の練習、試合および日常生活において実践するように促しています。

また、登録する約2,700チームに対して安全推進講習会を実施しました。

価値基盤を形成するための各種取り組み

コンプライアンス違反やドーピング陽性件数をなくすこと、安全・安心のラグビー環境を維持するために、2024年3月から「2024インテグリティ推進講習会」をオンラインで開催しました。

また、2025年3月には、2024年の講習会を刷新した「2025インテグリティ推進講習会」をRugby Family上のeラーニングシステムにて開催をしています。なお、今後はJRFUのホームページ上にも講習会コンテンツを掲載し、より多くの方に展開していく予定です。

 [講習会の詳細情報はこちら](#)

情報発信

JRFUのホームページ内のインテグリティ追求ページの構成とデザインを更新しました。加えて、インテグリティ追求・コンプライアンス強化に役立つ学習資料や関連情報を追加しました。

アンチ・ドーピングのアウトリーチ活動

- 2024年度は、全国中学生大会、全国高等学校大会において選手、指導者、保護者などを対象にアンチ・ドーピングのアウトリーチ活動を行いました。



外傷・障害予防の啓蒙活動

- ラグビー外傷・障害対応マニュアルを改訂しました。
- アプリア版「ラグビー外傷・障害対応マニュアル」の紹介や、傷害報告の組み合わせパターンの説明・傷害発生時の報告フローを追加した改訂版を発行しました。



選手・保護者・関係者の皆さま

JRFUではインテグリティ相談窓口を設置し、選手、指導者、保護者などからの相談に外部の弁護士が対応しています。相談内容に関して秘密を守りますので、安心してご相談下さい。

[相談窓口はこちら](#)



支部報告



関東協会

会長 伊藤 隆

6月20日、関東協会は日本協会、関西協会、九州協会に先駆けて100周年を迎えました。

携わっていただいた皆さまへ心より感謝をし、選手・スタッフ・チーム・運営に携わる皆さま・17都道府県の皆さまとともにラグビーの発展を進めていけるよう、この先の100年を見据えて、さらなる活動を進めてまいります。



[WEB 本年度の試合結果はこちら](#)



関西協会

会長 萩本 光威

2024年度の事業計画に沿った大会・イベントを実施することができました。特に初開催の関西ウィメンズラグビーフェスティバルは子どもから大人までたくさんの方にご参加いただき、ラグビーの普及・発展に繋がったと考えています。

1月、関西協会は創立100周年を迎えました。これまで関西協会に携わっていただいた皆さまへ心から感謝を申し上げます。そして次の100年も、選手・スタッフ・チーム、管下22府県協会の皆さまとともにラグビーの普及育成に努めてまいります。



[WEB 本年度の試合結果はこちら](#)



九州協会

会長 久木元 孝行

2024年度は九州セブンズ、九州3リーグ(社会人・クラブ・学生)をはじめ各カテゴリーの大会を順調に実施することができました。また、サニックスワールドラグビーユース交流大会2024、ナナイロカップ 九州ウィメンズ セブンズなど、海外チームを招聘しての大会も5年振りにフルエントリーすることができ、大いに盛り上がりました。2025年度は、さらなる飛躍の年となるよう努めてまいりますので、皆さまのご支援・ご協力を宜しくお願い申し上げます。



[WEB 本年度の試合結果はこちら](#)

表彰受賞者

JRFUでは、永年にわたり各地でのラグビーの振興、発展に寄与、貢献した個人または団体に贈呈しています。敬意および謝意を表すため、支部協会からの推薦に基づく、表彰制度を設けております。地域における普及活動などに対する評価と表彰の機会を設けることにより、顕著な実績を残した地域活動への功労とともに、好事例情報の共有化も進めています。



JRFU表彰制度

1. 功労賞

永年にわたり、各分野でのラグビーの普及、振興に寄与、貢献した個人または団体

2. 普及功労賞

永年にわたり、全国各地でラグビースクール、各層のクラブチームなどの指導・運営に熱心に携わり、競技人口の増加や地域でのラグビー活動の活発化、青少年の健全な育成に関し顕著な功績を残した個人または団体

3. 普及活動優秀協会賞

戦略計画に掲げるビジョン、ミッション達成に向けて質・量ともに優秀な普及活動と功績を残した都道府県協会およびその傘下の協会

2024年度受賞者



功労賞
関東協会推薦
額賀 康之 氏

永年にわたり地域医療に貢献、地元歯科医師会長としても手腕を振るわれておられました。関東協会公認レフリーや役員も務められており、「歯科委員会」立ち上げに尽力。適正なマウスガードの開発、普及活動に多大な貢献をされています。



功労賞
関西協会推薦
清水 敏昭 氏

姫路市協会の設立、姫路ラグビースクールの開校に尽力され、1956年播州親善ラグビーフットボール大会と1962年姫路7人制ラグビー大会を開催し、現在まで継続中。90歳を迎えられた現在もスクールの練習に毎週訪れています。



功労賞
関西協会推薦
高岡 義伸 氏

名古屋市教員として採用され、中学の部活動を通じラグビーの普及発展に尽力されました。1989年愛知県協会の理事となり、関西協会、JRFUでも理事、理事長の職を全うされました。



功労賞
関西協会推薦
難波 義郎 氏

1974年の姫路ラグビースクール創設に携わり、50年以上にわたり指導者や生徒の育成に尽力されました。現在も名誉校長として毎週グラウンドに立ち、変わらぬ情熱で地域ラグビーを支えておられます。



功労賞
九州協会推薦
田淵 高德 氏

長きにわたり理事として鹿児島県協会の運営に大きく寄与され、その間、関東の有力大学を招いて「鹿児島招待ラグビー」を恒例イベントとして実現、県高校選抜チームのオーストラリア遠征も実現し、さらに鹿児島県とタイとの交流戦の創設にも貢献されました。



スポンサー

日本代表スポンサー

日本代表トップパートナー



男子日本代表オフィシャルパートナー



女子日本代表オフィシャルパートナー



男子日本代表オフィシャルスポンサー



女子日本代表オフィシャルスポンサー



日本代表オフィシャルサポーター



日本代表サプライヤー



JAPAN BASE スポンサー



プリンシパルパートナー



オフィシャルパートナー

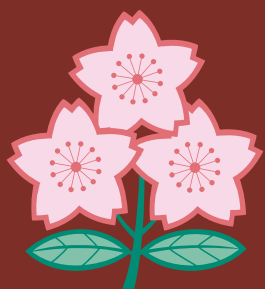


オフィシャルサポーター

セコム株式会社	東芝エルイーソリューション株式会社
株式会社ゴールドウイン	アサヒ飲料株式会社
TOTO株式会社	有限会社ライク・ア・ウッド

JRFUプロバイダー





**JAPAN
RUGBY**

2024 JAPAN RUGBY ANNUAL REPORT

発行日 2025年6月30日
発行者 公益財団法人日本ラグビーフットボール協会
〒107-0062 東京都港区南青山一丁目1-1
新青山ビル 東館5階
企画・制作 株式会社ブレーンセンター
協力 EY Japan株式会社

編集後記

アニュアルレポートの作成担当として2年目を迎えました。2024年も日本ラグビーは多くの挑戦と前進の年となりました。男子代表の国際試合での奮闘、女子セブンズの好成績、そしてリーグワンの熱戦が全国に感動を届けました。本レポートが一年の歩みを振り返る一助となれば幸いです。今後とも温かいご支援をお願い致します。

「ANNUAL REPORT2024」をお読みになった
ご感想をお聞かせください

感想はこちらから



リスク・ガバナンス室
柿ヶ野 美美